

Title	昭和二十七年度秋期史學科見學旅行記
Sub Title	
Author	志水, 正司(Shimizu, Masaji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.26, No.1/2 (1952. 12) ,p.143- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19521200-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和二十七年年度秋期史學科見學旅行記

此度は見學の目的地を東北に選び、十月二十二日二十二時急行「きたかみ」にて出發。一行淺子・河北兩先生はじめ學生三十八名の多數。

十月二十三日朝平泉着。先ず發掘中の無量光院趾を訪ね、作業をされていた齋藤忠氏を傾わして御説明を載いた。舊のまゝ整然と敷並べられた雨落講の石組が習廓に當る部分から發掘されていた。「吾妻鏡」の記事の通りに宇治の平等院鳳凰堂とその規模を同じすることが確認されるという。前方の水田は往時の苑池と考えられ、その中には中島や石組のあとと、おぼしきものが残されている。

次いで義經の居館址と傳えられる高館へ登り、こゝから關山中尊寺へ出る。古杉鬱蒼とした參道を上り、本坊の本尊阿彌陀如來、峯藥師堂の藥師如來、關伽堂の藥師如來の諸像（いずれも丈六、うち本坊・關伽堂の二體は災火を慮つて兩肩兩膝が取外できるとしてある）拜しながら、金色堂の前へ出る。

金色堂は藤原清衡が天治年間に營んだもので、方五間の覆堂の

中であつて方三間の寶形造、屋根は珍らしく木製瓦。その外部は柱・料枳・扉・壁・軒から屋蓋に至るまで悉く漆を塗り金箱を押している。内部は柱・梁いたるところ螺鈿を嵌め金具を附して飾る。殊に内陣の柱は所謂七寶莊嚴の卷柱で柱脚に金銅製蓮の礎がついている。柱身には十二光佛を蒔繪で描き金銅板の光背を造り、光背の外部の空間は七寶蒔繪を施し、又箇所箇所に螺鈿の優美な寶相華文を現わした模様帯がある。須彌壇は中央と左右に設けられ、いずれも上に阿彌陀三尊・二天・六地藏の諸像を安置し、中央須彌壇の下には清衡、左には基衡、右には秀衡の遺骸が葬つてあつたが、今は中央壇下に三つの棺を並べてある。全體として永い年月を經剝落し破損し色褪せて今は寂びた別趣の姿をみせてはいるが、金色燦然たる莊嚴の美を儘して極樂淨土を地上に現出せしめた往時の姿をよくしのばせる。

經藏ははじめ二階瓦葺であつたが、野火のための上層を失つた。今單層になつてゐるのはそれがためである。黒漆の經管二百六十合には紺色金銀泥の寫經二十卷、紺紙金泥の寫經六百余卷を藏している。格狭間に打出しの迦陵頻迦を嵌めた八角須彌壇が印象に残つた。辨賤天堂には紺紙金泥書細字の金光明最勝王經十界寶塔曼陀羅十幅が納められている。續いて寶物殿に入る。中尊寺當局の好意によつて祕佛一字金輪像を拜觀させて載く。藤原末期の様式であるが、玉眼嵌入、豐滿婉麗、「人膚の大日」の異名さ

こそとうなずかれる。寶物殿にはこの外、寺中最古といわれる秀作金剛界大日如來像、金色堂本尊の天蓋、同堂内に使用された幡頭、磬架、清衡の中尊寺供養願文の寫し二通——一は北畠顯家の筆、他は藤原輔方の認めた奥書がある——などが所藏されている。有志は千手堂へ千手觀音を拜みに行く、頭上で最上方の兩手が組まれているのが特徴。

山を下つて毛越寺を訪れる。残るはたゞ點々と散在する大小堂宇の礎石、大泉池とその石組のみ、本坊の前に「夏草や兵どもが夢の跡」の句碑が立つていた。

この日は鹽竈まで引返して宿泊。

十月二十四日、小雨降る中を松島へ。先ず雄島へ渡つて雲居禪師の坐禪堂を見、南端に出て頼賢の碑を訪ねる。六角の韜堂の中にあつて、草體の細字で書かれている碑文は元僧寧一山の自撰自書である。拓本の用意がなかつたことは惜まれてならない。觀瀾亭は書院造の建築で、奥の間の襖及壁には金地に華麗な樹木草花が描かれ、その筆者は狩野山樂と伝えられている。淺子先生から詳細な御説明を載く。五大堂を経て瑞巖寺へ。現在の伽藍は伊達政宗が慶長十四年に再建したもので、本堂の桁行十三間、梁間九間、單層本瓦葺の大きなもの。室内の極彩色繪様彫刻及び金碧畫は華麗莊重で寺院といつた感じからは遠い。最も我々を引き着けるのは玄關で、三間六面、乙字形をなし内部を窺うことの出來ぬ

ようにしてある。唐様で一種異國的な意匠の中にも素木造と白壁とで落着いた情趣をかもし出している。

午後は多賀城趾へ行く。多賀城は奈良朝以來永い間東北經營の中心であつた。沖積平野に斗出した丘陵の上であり、北・西・南は沼川に面し、東は深く入り込んだ小谿谷によつて距てられるといつた極めて要害の地である。南門の趾と呼ばれるところには數箇の礎石を存し、そこに多賀城碑が覆堂の中に立つていた。内城内の正廳の趾には礎石が點在している。その西部を「御座ノ間」と稱し、吉野朝時代義良親王の御座所であつたとすると傳えている。途中菊池家へ寄つて瓦をはじめ遺物を見せて載いた。仙台にて宿泊。

十月二十五日、早朝東北大學内の奥羽資料調査部を訪ね、伊藤信雄先生の御案内を載いて見學。東北地方の先史時代文化の概要を知り得るといつた豊富な、整理の行き届いた蒐集であつた。次いで大崎八幡に詣り、權現造の典型的な遺構を見學した。これは慶長十二年伊達政宗の造營に係るもので、内外とも漆塗とし渡金の金具を用い極彩色を施し、又桁組の間墓段の内など隨所に繪様彫刻を充して豊麗を極め、よく桃山時代の特色を示している。隣接した龍寶寺には清涼寺式釋迦如來像がある。この様式のものとして最北の分布例である。一旦宿に歸つて晝食後、陸奥國分寺趾と木下藥師堂を訪ねた。前者は白山神社附近に塔の心礎と數箇の

礎石を存し、後者はその高欄擬寶珠に「慶長十二年丁未十月日云々」とある銘の通り、細部の手法はよく桃山時代の風格を示している。

十月二十六日、一行は二分して、一は歸路につき、他は白石を経てバスで高倉に出、高藏寺を訪ねた。全く交通の不便なところである。高藏寺の草創については審かではないが奥州藤原氏を關係があつたらしい。方三間の阿彌陀堂で、太い柱、大きな舟肘木、そして茅葺、素朴にして力強い安定を造る。藤原時代末期の様式を傳えているという。平泉などの裝飾に重きを置いた華奢な建築とは極めて對照的である。本尊の阿彌陀如來像は丈六で堂とほぼ同時代の作と思われる。傍ら下同形の破損像があつてこれから當時の造像過程の一端を窺うことが出來た。角田・中村を経て平に出て宿泊。

十月二十七日、先づ白水の阿彌陀堂を訪ねる。これに秀衡の妹徳尼の建立という。六三間の寶形造。外觀は屋根の勾配が急で露盤の小に失するの感。須彌壇上中央に阿彌陀その左右に觀音勢至そして二天といった配置は平泉と同じで、諸佛自體も中尊寺のそれに似ている。次いで大甕・常陸太田を経て金郷の薬師を訪ねる。縁起を尋ねればこれも奥州藤原氏につながる。尊容・台座など平泉のそれに似て、所謂定朝様である。

平泉・白水そして金郷の諸像はそれぞれ共通する一様式を示し

こゝに當時の一の東北文化圏といったものが想定されるわけで、金郷はその南端に位する。中央に於いて社會の中世的推移に貴族文化の基盤が失われつゝあつたとき、社會分化の未だ十分ならずなお多くの古代的要素をとめていた東北に地を求めて、新しい貴族文化圏が成立したのであつた。しかそれは單なる中央文化の移植に止まらず東北独自の地方的要素を包含するものであつたことは最近屢々指摘される所である。そしてこの文化も新しい武家勢力の進出の前にやがて凋落していつたのであつた。終に旅行中終始種々の便宜を計つて勞を惜まなかつた方々に厚く御禮申し上げる次第である。(志水正司記)

史學研究會例會報告

第四〇八回例會

昭和二十七年九月二十日午後三時

於六番教室

その後の法隆寺問題

淺子勝二郎氏

クロヴィス王のカトリック改宗

萩原 要君

マグナ・カルタの封建的性格

杉原 義文君

第四〇九回例會

昭和二十七年十月十六日午後三時

於七番教室

合成樹脂による遺物保存法について

清水 潤三氏